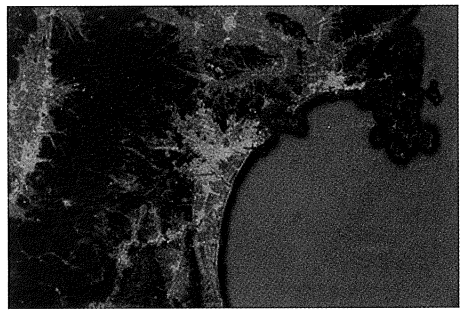
新しい物語の語り方の提案

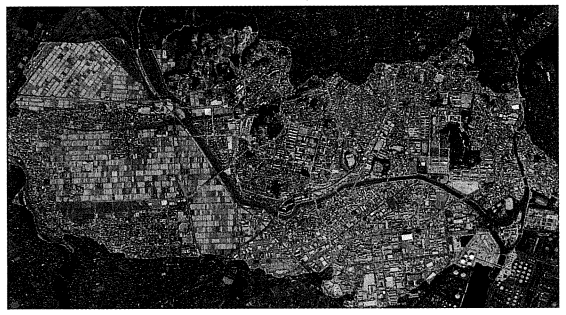
大場　俊拓
福屋研究室

設計主旨

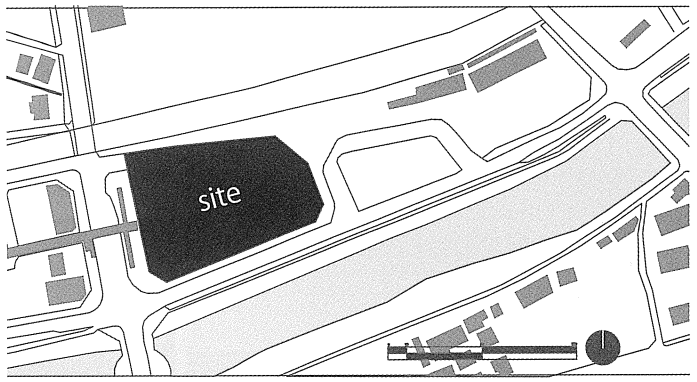
近年、電子データのやり取りが主流となってきた。データのやり取りなど、手軽に行えることがが多くなっている。しかし、その手軽さという利点が、時としてものの扱い方を蔑にしていまうと考えられる。つまり、物としての価値の低下が上げられる。この場合の、低下とは、デジタルデータであれば、物 (データ) の価値がみな均等としての扱いと落ちる。そのため、ものや物語が蔑になっていしまうと考えられる。今回、提案するのは、そのデータ上の物語に注目して、電子書籍をピックアップした建物である。そもそも、電子書籍は、文字データだけではなくて、音声、映像だけではなく、振動なども電子書籍に含まれる。物語を語る要素の表現の自由度に溢れている。今回は、その電子書籍の全面的なサポートのための施設を提案しる。



宮城県



多賀城市

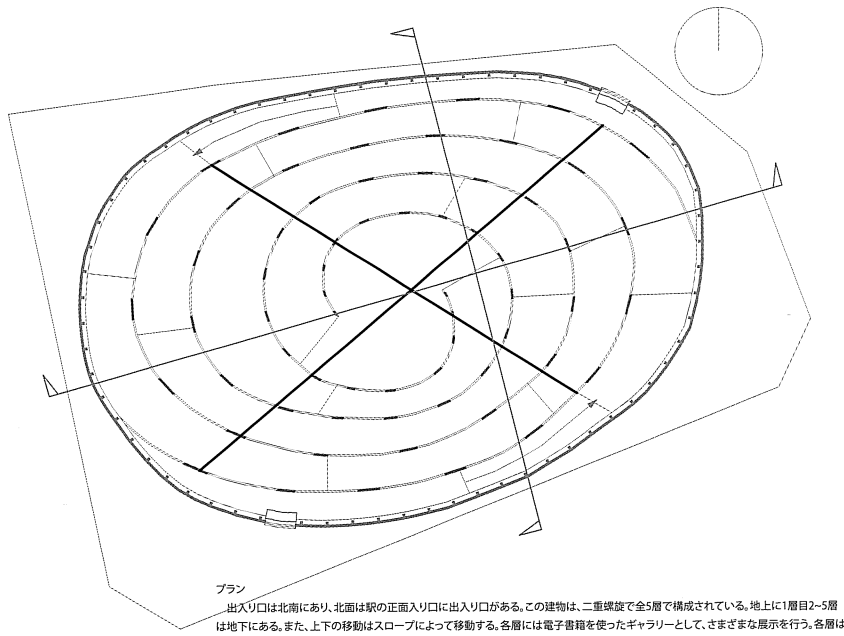


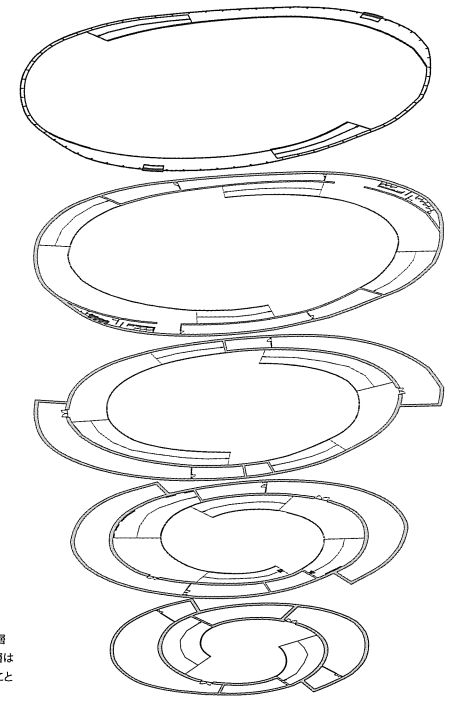
宮城県多賀城市多賀城駅前の広場

宮城県多賀城市は宮城県のほぼ中央にある市である。多賀城市の面積として 19.65km²、人口として 62,126 人（推計人口、2013 年 12 月 1 日）人口密度は 3,160 人 /km² である。人口も緩やかに上昇している。隣接自治体として仙台市、塩竈市、宮城郡：利府町、七ヶ浜町の 4 市町村と隣接している。

市の特徴としては、仙台市のベッドタウンとしての性質を持っていることや、歴史が長いことである。また、市の名称は陸奥国府「多賀城」に因んでいる。

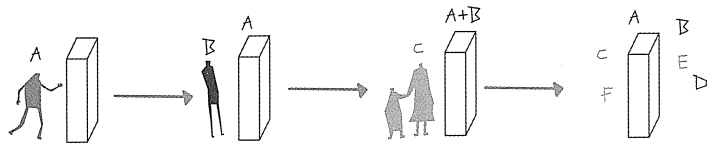
町は街道（国道 45 号）沿いに発展してきたため、商店はロードサイド店が多く、“ 市の中心部が存在しない ” という特徴をもつ。敷地選定理由としては、多賀城駅が新しくリニューアルしたことであるとことで、多賀城駅周辺の整備計画の一環として行われたことである。この計画の目的として、道が狭くいつも不安や危険を感じていることや、まちの中心に活力がないことがあげらるのためである。また、TSUTAYA が多賀城市の図書館をプロデュースという話もあり、地方都市の発展のため敷地とした。





プラン

出入り口は北南にあり、北面は駅の正面入り口に出入り口がある。この建物は、二重螺旋で全5層で構成されている。地上に1層目2~5層は地下にある。また、上下の移動はスロープによって移動する。各層には電子書籍を使ったギャラリーとして、さまざまな展示を行う。各層はの高さが異なり、素人が手軽にできるものから、大規模な展示までできる。そして、最大の特徴として、二重螺旋により、行きと帰りが違うことである。

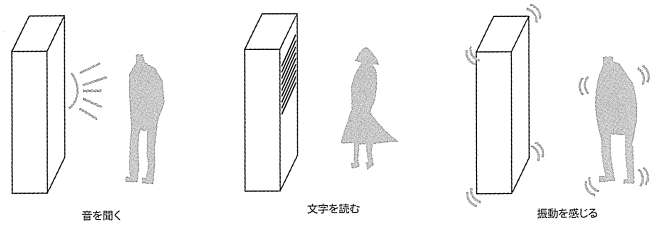


Aさんが操作するとその内容が残る

先ほどのAさんのの操作内容がお勧めとして、Bさんに紹介される。

AさんとBさんの内容がCさんに紹介されて、それが、新しい流れとなっていく直接の関係が無いが、それが繋がっていく

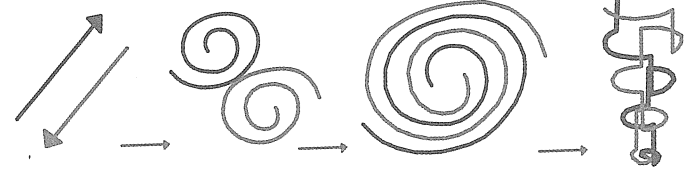
そして、その蓄積のよって、各デバイスが独自の存在となっていく。デジタルの無個性が解消される。



音を聞く

文字を読む

振動を感じる

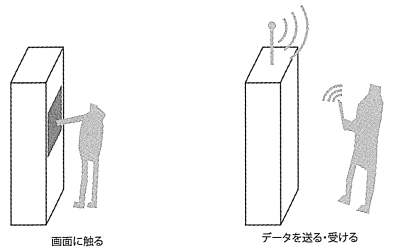


最初はただすれ違っていた関係

その流れを巻き、二つの渦をそこに発生させる。

そして、次第に互いが合わさり、大きくそして二重の螺旋ができる。そして、流れができる。

また、その大きな二つの螺旋が次第に下に、狭くなり、地下に新しい空間を形成し始める。これが今回の計画である。



画面に触る

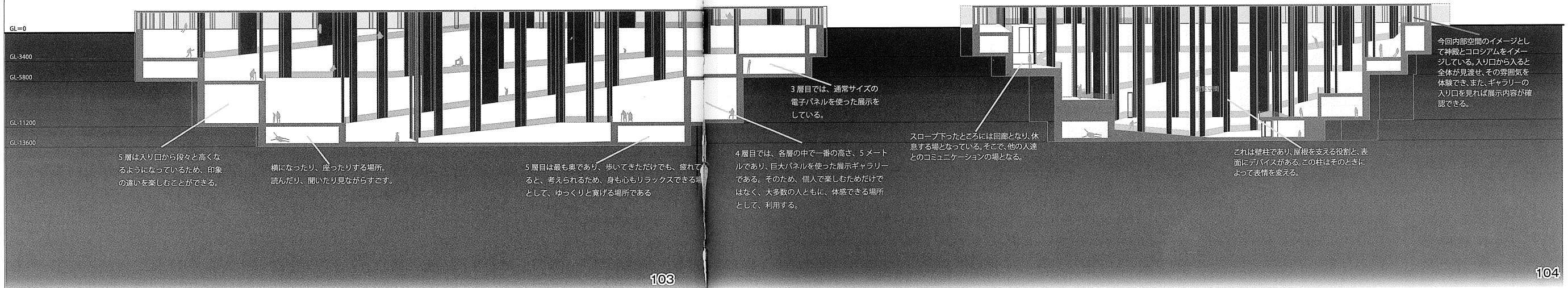
データを送る・受ける

電子書籍とはデバイスを使用して、利用するものであり、紙媒体のものに比べ、表現が豊かである。電子書籍は、文字データだけではなく音、映像、振動など視覚だけではなく、聴覚、触覚、嗅覚、など五感に訴える物である。そのため、この建物の内部のあらゆる場所に、大小さまざまなデバイスがおいてある。

デバイスの送受信ができ、そのひとつとして同じ内容がダウンロードしたものが無くなる。人に操作された数だけ深みが増すデバイスであり、休憩室のデバイスでは、リラックスできる映像が入っているなど、デバイスに個性ができる。電子データにありうる経さが無くなるではないかと考えられる。物(データ)としての価値が重くなる。

デジタルなデバイスを使った建物だが、全体的にスロープと回廊で計画されている。また、計画のイメージとして、アナログの流れと、デジタルの流れが螺旋状に集まっていき、互いの良い所をいかせる建物として計画した。

壁には、パネルデバイスがあり、あらゆる場所で操作ができる。また、パネルの特徴として、その階層にそれぞれ、テーマがあり、そのテーマごとにダウンロードされているコンテンツが違う。そして、最大の特徴が、操作する人によって、デバイスが学習していく特長である。それによって、デジタルの無個性が無くなり、存在が重いくなる。目には見えないが点と点が繋がるような、関係ができ、一方通行ではない相互性ができる。デバイスを媒体としたコミュニケーションツールである。



06
2013年度
建築学科
卒業研修
報告集
東北工業大学